

農業は今。

ミニトマト農家の挑戦

実りの秋。
カボチャやジャガイモといった農産物が収穫期を迎える中、主要農産物の一つである「ミニトマト」も出荷のピークを迎えています。
平成16年、それまでの栽培方法を捨て、全国のトップブランドの産地である仁木町トマト生産組合に加入、新たな取り組みを始めてから3年目の秋。
転換期を経た積丹産ミニトマトの変遷についてお知らせします。

平成8年 10戸の農家でスタート

積丹町のミニトマトの生産は、平成8年からと比較的最近の農作物であり、同年及び平成9年の2か年で、北海道の元気づくり事業の制度を利用、30棟のビニールハウスを整備し栽培への取り組みが始まりました。
初めは10戸の畑作農家が糖度が高く比較的品質管理が容易であるといわれていた品種「キャロルセブン」を栽培しました。

営農方法を転換

平成10年3月、積丹町・仁木町・赤井川村・小樽市の農協が合併し、新おたる農業協同組合が設立しましたが、その後も思うような生産体制や販売額の向上につながらず苦戦が続ききました。
そのような中、平成15年5月、新おたる農協積丹支所長現積丹事業所長に西岡一彦さんが就任しました。
「以前に仁木町でトマトを担当していたこともあり、トマト作付農家の、未来に向けた手伝いが少しでもできれば。」と西岡所長はミニトマト農家を交え、今後の展望について議論を重ねました。そして農家数が少なく

出荷数が不安定な商品を継続して出荷するよりも、戦略的な市場販売に実績のある仁木町トマト生産組合の一員として栽培技術を習得し、生産量の増収と併せ所得の向上につなげていこうと方向性の転換を決め、同組合との協議には西岡所長が仲介、受け入れについて話がまとまり、平成16年から技術指導が始まりました。
この時既に当町のミニトマト農家は5件に減っていました。

仁木町トマト生産組合へ 営農技術を学ぶ

仁木町トマト生産組合は、トマトの需要が少ない時代から30年以上にわたって生産に取り組み、平成5年からミニトマトに転換、畑中勝征会長現名誉会長を中心に細かなデータ分析から徹底した指導管理で、天候や気温に左右されず高品質を維持したままでの出荷体制を確立させ、夏秋産地として全国のトップブランドの産地となっています。
営農指導が始まった平成16年、当町と気候風土の似た仁木町大江地区への春・夏・秋それぞれの作業ポイントに合わせた視察研修からスタートし、その後畑中

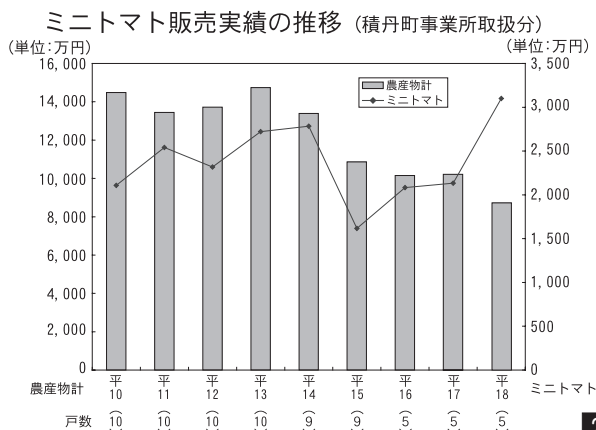


特性

糖度8度を超える甘さにほどよい酸味がある。皮はやわらかく弾力があるため、裂果が少ない

品 種 キャロルセブン
商 品 名 もてもてネ

積丹町でつくっている
トマト



農業は今。

ミニトマト農家の挑戦



美濃 寛さん

23歳の時、北海道の雄大さにあこがれ移住。野塚町の岩本牧場に牧夫として従事。昭和62年に自立し畑作に転身。ミニトマトのほかカボチャ、スイートコーン、アスパラなどを栽培している。栃木県出身。50歳

丹精込めたトマト 子どもたちに食べてほしい

「苗半作（なえはんさく）」という言葉が農家にあります。これは、種まきから定植までの間の苗づくりでその年の出来の半分は決まってしまう。それだけ苗づくりは重要で、また温度や水分など環境の影響を受けやすくデリケートな期間なため非常に気を使います。

これからもトマトのもつ多様性を探りながら安全な肥料でおいしいトマトづくりに努め、あの人々が作ったものなら安全だと言ってもらえるような生産者の顔の見える農業に取り組んでいきたいと思えます。

また、地元の子どもたちにこのトマトを食べてもらいたい。例えば給食の一品として提供できたらいいですね。一人でも多くの子どもたちにこのおいしさを知ってもらいたいと思えます。そして農業に興味をもってもらえたらうれしいですね。

会長を初めとした仁木町トマト生産組合の役員から土壌・品質管理といった生産技術の指導から生産者の規律に至るまで細部にわたり厳しく営農技術の心得について指導を受けました。

また、平成16年、17年の2か年にわたり、町では一層の生産拡大の推進に向け単独事業として補助金を交付し、22棟の野菜簡易ハウスが新たに整備され、本格的な取り組みに向けた基盤が着々と整備されてきました。

しかし、新たな取り組みをスタートさせた平成16年には、台風18号が町内に大きな被害をもたらす中、20棟のハウスが全半壊するなど大打撃を受けました。農家は手作業で曲がったパイプを直す作業に追われ、全国的な被害で資材が不足し、ハウス資材価格が高騰するなど経営環境が厳しい生産者にとって町の補助金は効果が大きかった」と西岡所長は話します。

全国ブランドとともに 3年目を迎えたミニトマト

「これまでの栽培方法が根底から覆されるほど生産者として意識の持ち方に強い衝撃を受けました。」とミニトマト農家の一人である美濃寛さん（丸山地区）



特性

甘酸のバランスのよい濃厚な味。果色が鮮やかで果肉が厚く、日もち性がよい。

品 種 シンディースイート(中玉)
商品名 かぐやひめ



特性

明るいイエローカラーでフルーツ感覚の甘さ。高糖度で酸味が少なく、裂果が非常に少ない。

品 種 イエローミニ
商品名 もてもてキッキ



はその時のことを振り返り話してくれました。

取り扱う品種はこれまでと同じ「キャロルセブン」でしたが、どこにその違いはあったのでしょうか。

美濃さんは、「特に肥料に対する考えが180度変わりましたね。」と話します。

それまで当町では化学肥料を散布していましたが、葉や茎にカビが発生するなど病気が多くみられ、品質にはらつきがありました。

生産者としてより安全で安心できるものを提供するため低農薬、有機肥料栽培への切り替えが行われ、肥料を蒔く時間にこれまでより3倍以上を要するなど、繁忙期には朝3時に起床し作業を始めることもあります。これにより手間をかけることで品質が安定し、計画的な出荷体制が整備されてくるなどその効果は顕著に表れてきました。

当初、本格的な共販体制は、平成18年から予定し、それまでの2年間は技術指導期間とする計画でした。しかし、ミニトマト農家の懸命に取り組むむきな姿勢と生産基盤となるハウ棟数が整備されたことから、畑中会長ら役員から計画より1年早い平成17年から本格生産に着

手することを認められ、積丹産のミニトマト生産は今年で3年目を迎えることができました。

現在当町ではこれまでの「キャロルセブン」のほかに、昨年は「イエローミニ」が、今年からは中玉の「シンデリースイート」を作付し、それぞれもてもて「もてもてキッキ」かぐやひめ」のネーミングで販売され、いずれも高糖度で市場ニーズが高い商品となっています。

収穫時期は、7月中旬から11月初旬まで続きます。出荷は道内から九州まで全国へ高級トマトとして販売されています。一般のトマトと差別化を図っていることから道内では札幌市内の大手デパートで扱っているだけで、今の流通体制の中では地元への販売ルートは確立されており、身近で栽培されているが、私たちがこれを口にすることは残念ながら難しい状況にあります。

農業収益の安定確保へ 農家の挑戦は続く

生産者側も高齢化の進展や担い手不足による農家数の減少など大きな問題を抱えています。収穫期には当然多くの労働力を必要とし、品質を一定に保つ

には長い期間での管理も必要となる中で西岡所長は、今後ますます労働力の確保が重要となる。」と話します。

ミニトマト農家は、カボチャやジャガイモなど他にも農作物を栽培しているところが多く、ミニトマトに比べ作付面積の広いこれら農作物との兼ね合いや主要品種であるキャロルセブンは一般のミニトマトに比べ、収量は多くない品種で、均一な着果とはなりにくいうえ、当町のミニトマトは枝先に行くにしたがい実が小さいなど抱える課題はたくさんあります。

現時点においては、栽培規模の拡大よりも品質の向上と収量を増やすことを目指している中で、ミニトマトの生産は年々収量、販売額ともに増加しており、農家収益の向上への取り組みが実を結びつつあります。

町の基幹産業の一つを担う「農業」。まちの活気を左右させる農業は重要な産業です。

多様化する消費者ニーズを的確にとらえ柔軟な意識改革で自分たちの農業を未来あるものにしてようと前例踏襲によらずこれまでのものを捨て新しい手法を受け入れたミニトマト農家の皆さんの挑戦はまだまだ続いています。

積丹町でも買える！

積丹産ミニトマトジュース



品種はキャロルセブンを使用。町内では、岬の湯しゃこたんで取り扱っています。

一杯250円。
1瓶(1.5L入)1,000円で購入も可。

